HOMELANDS

「差別なき国家」の差別的な現実

PHOTOGRAPHS BY **PIETER DE VOS**

全ての人種が参加する選挙が実施されてから四半世紀。ポスト・アパルトヘイトの「差別なき」南アフリカは、大陸屈指の経済力を誇り、貧困率も減少するなど確かな発展を手にした。

その一方で、拡大する貧富の格差は世界最大級となり、急速な都市化で住む場所を奪われたホームレスが急増。そんな経済発展のひずみの象徴的な場所がある。首都プレトリアの裕福な地域の中にある貧困街、ウッドランド・ビレッジだ。

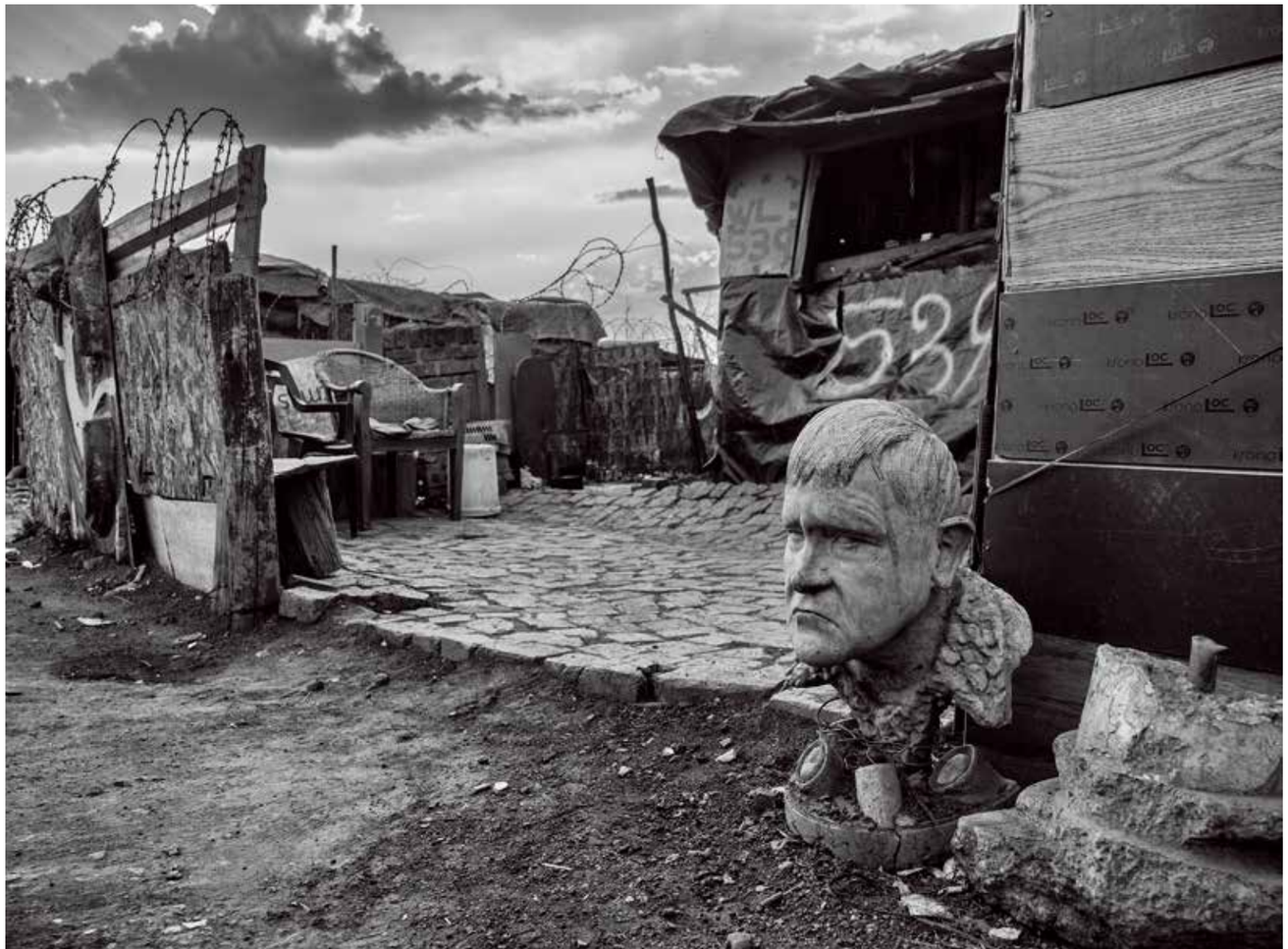
行き場を失った失業者や、生活基盤を持てない移民のために設けられたこの場所には、国内だけでなくレソトなど国外からの移住者合わせて846世帯が暮らす。「不法住民」として周囲の反発を受けながらも、裁判所は7年前に彼らの居住を許可した。それでも彼らの生活に安寧は訪れていない。排他的な人々の冷たい視線と暴力と貧困は、絶え間なく彼らを追い込む。

南ア生まれのピーター・デボスは、かつての祖国で向けるカメラの先にこの場所を選んだ。世界で進む分断社会と足並みをそろえたかのような貧困街。そこに暮らす1人の男性の視線を通じて、南アの現実と絶望する人々の姿を伝えるために。 N

Picture Power

貧困街のリーダー、ドナルド・バンダ（左右両ページ）が暖を取るために燃やすのは政権与党のマニフェスト。写真家のデボスは彼の視点を通じて断絶の現実を撮った

もう人生を送ることに**力尽きてしまった**
家ほどいいものはないだろうけど
家を家とも思えなければ、**さまようだけ**
僕らは、**失われた世代だ**



（右ページから反時計回りに）暴力や襲撃にも耐えねばならない被差別スラム、祈りは貧困を支える精神的よりどころで「見えるものによらず信仰によって歩む」はドナルドが好きな聖書の一節、居住者のアリー（左）を抱き締めるドナルドは、住民たち（左）の相談役でもある

（下から反時計回りに）ドナルドの「家」から見える景色、「人生は捉えどころのないもので理解したと思ったら形を変え、次はどんな表情を見せるか分からない」と語るドナルド、寄せ集めの物で生活を維持する、結婚式後にドナルドが妻ローズ（中央）とキスする姿を喜ぶドナルドの母アナ（右）

Photographs from "HOMELANDS" by Pieter de Vos, published by Daylight

撮影：ピーター・デボス　1970年、南アフリカ生まれ。76年、オランダ系白人の両親と共にカナダへ移住。アルバータ大学で人類学の博士号と公衆衛生学の修士号を取得し、郷里、帰属意識、アイデンティティーなどをテーマに作品を制作している。本作は、最新写真集『ホームランド』（米デイライト・ブックス刊）からの抜粋